



1面の続き

大相撲の多国籍化について、柔道と剣道を例に比較してみよう。

柔道は早くから、よりダイナミックに興味深く観客へ訴えるスポーツに変容する国際戦略を選んだ。しかしその代償として、体重別制やカラー道着の導入を強いられた。さらに、技評価の細分化と一本勝ちの減少を通じて、柔道発祥の国・日本の伝統は国際的に少数派へ転じてしまう。

他方、剣道は国際化ではなく、海外普及・国際普及・国際対応という表現を使っている。日本の伝統文化が培った剣道の古典的ルールを変えず、脱日本化させずに海外へ「普及」する立

山内昌之氏 1947年生まれ。東大名誉教授。横綱審議委員。4月、日本相撲協会の「大相撲の継承発展を考える有識者会議」委員長として、提言書「大相撲の伝統と未来のために」を取りまとめた。

場は、私たち「有識者会議」が提言をまとめる上で参考になったものだ。

国際柔道のように勝負判定の点数化や体重別の制度

「入日本化」国技守る

を導入すれば、小兵の力士が大型力士を負かす無差別級を体現してきた日本の大相撲は終焉を告げる。

また外国出身者は、自発的に部屋へ入門して師匠の指導やおかみさんの愛情、兄弟子との稽古によって、疑似大家族の中で相撲道と人格とともに成長させていく。これは「同化」や「強制」ではまったくない。

有の国技（相撲協会定款

それどころか、相撲の多国籍化は、ユネスコが2001年に採択した「文化的多様性に関する世界宣言」が確認する「文化とは特定の社会、社会集団に特有の精神的、物質的、知的、感情的特徴をあわせたもの」との原則を尊重している。

同時に、大相撲への入門とは、相撲を支える日本の文化や慣習への接近でもあ

る。外国出身力士は「入日本」あるいは「入日本化」するのであり、脱国籍・脱民族による同化や「日本化」を強制されるものではない。自らの選択で大相撲の世界に「入る」ことは、大相撲に関わる日本の文化・伝統・慣習にも漸進的に「入る」ことを意味する。

結果として、「我が国固有の国技」（相撲協会定款

う。国際性の形式をまといつつ、本質は一部欧州の口カル・スポーツの名残をとどめている感もある。また羽生結弦選手の分析によれば、フィギュアスケートには採点の欠陥とそれを悪用した演技があるらしい。審判員は、同じ場所に座って決まった角度から見ると、ジャンプの回転不足や違反を見逃すことが少なくないそうだ。

水上で前向きに踏み切るアクセルは、羽生が16分の1回転したところで跳ぶのに対し、ひどい人では4分の1回転もしてから跳んでも明確な減点ルールがない。審判員の死角をついた不完全な演技が減点されないのはAI映像で総合的に解析しないからだという。

大相撲は行司以外に土俵下にも勝負審判5人を四方に配置しビデオ映像も早くから参考にしてきた。多方向・多角度から眺める判定

に個人の主観が入る余地はなく、日本人を含めて多国籍の力士全員に公平という点こそ「国際的」ではないのか。それでも力士の中には、行司軍配に前代未聞の不服を言い立て、大相撲の徳やたしなみを無視する者も現れたのには驚く。

英文は金曜日「ジャパン・ニューズ」掲載予定です